

関西日仏学館と京都の美術家— 第二次世界大戦期の交流について —

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学美術学部 公開日: 2019-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菊川, 亜騎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/0000000250

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



関西日仏学館と京都の美術家

— 第二次世界大戦期の交流について —

French Institute of Kansai and Artists in Kyoto:
Cultural Exchange during World War II

Aki Kikukawa 菊川 亜騎

はじめに

芸術の都パリはたとえ戦争によって敵国になろうとも日本人美術家の憧れの地であり続けた。海を越えて届けられる書籍や雑誌と同様に、貴重な文化の窓口となったのが日仏会館であった。国家主導による文化の伝道には様々な政治的背景もあるが、ともに同じ芸術をわかちあおうという人々の交流の拠点として機能したのもまた事実である。第二次世界大戦のあいだ日仏会館が美術の分野でどのような役割を担ったか、林洋子氏や藤原貞朗氏らによって研究が進められてきた。2014年の日仏会館創立90周年記念シンポジウム「両大戦間における日仏関係の新段階」の講演に基づく論集『日仏文化』(83号、日仏会館)は近年の研究成果がまとめられており、世界大戦を挟んだ日仏の美術家あるいは美術史家たちのかかわりが徐々に明らかになりつつある。

その一方で、東京とは異なる文化的土壌をもつ京都ではどのような状況があったのだろうか。筆者は京都市立芸術大学芸術資源研究センターの重点研究「京都美術の歴史学 京都芸大の1950年代」にて、終戦前後における京都芸大の教員の活動とその教育について美術史と社会史から横断的に再検証するプロジェクトを進めており、その足がかりとして、今年度は京都における日仏交流の中心となった関西日仏学館(現・アンスティチュ・フランセ関西(IFJK))の活動に注目した。学館が美術家達どのように関わっていたのか、まだまとまった研究はない。だが京都大学人文科学研究所「みやこの学術資源研究・活用プロジェクト 京都における日欧交流史の初期調査」(立木康介准教授研究代表)がこの学館の歴史の再構成に向けて資料のコーパス作成を進めており、その協力を得たことによって、学館をめぐる文化人たちの交流の軌跡が明らかになってきた。本稿は、関西日仏学館で開催さ

れた美術にかんする文化プログラムや重要な役割を果たした人物について整理し、在日フランス人と美術作家のネットワークの一端を明らかにする。なお京都大学作成のコーパスはアンスティチュ・フランセ関西やフランス外交文書センター(Le centre des Archives diplomatiques, La Courneuve et Nantes)、故宮本正清氏(元学館教授)所蔵の資料をアーカイブ化したもので、本稿で用いた資料の表記はその整理番号に従うものである。

1. 九条山での開館—渡仏作家との交流

1926年、日仏会館は駐日フランス大使ポール・クロードル(Paul Claudel, 1868-1955)を中心に設立された。フランス外務省直属の機関である会館は、インドシナに開設された極東学院(École française d'Extrême-Orient)を中心とする植民地国研究機関の一環でもあり、フランスのアジア地域における重要な拠点となった。この日仏会館設立の翌年、1927年11月に京都市左京区の九条山に設立されたのが関西日仏学館である。開館の経緯についてはミッシェル・ワッセルマン氏「関西日仏学館の設立」『日仏文化』(83号、75-81頁)ならびに山中悠希氏「東京日仏会館と関西日仏学館」『両大戦間の日仏文化交流 Revue Franco-Nipponne』(第三巻、ゆまに書房、2015年、307-312頁)の論考などにまとめられているが、ここでは概略を記しておこう。関西日仏学館の建設は当初予定されていなかったが、日本文化の中心地として京都を愛したクロードルの働きかけにより、稲畑勝太郎など関西の実業家たちの支援をうけて開館した¹⁾。当初は夏季限定の語学学校として構想されたが、豊かな寄付を利用し通年制の施設となる。フランス大使を会長に日本人も含む財団法人日仏文化協会が運営を行ったため、東京館とは異なりその活動も比較的自由度が高く、街に根ざした豊かな文

化交流が育まれた。

クローデルは1921年から1927年まで日本に滞在し、関西を訪問するなかで山本春拳や富田溪仙など京都画壇の作家と親交をむすんだことはよく知られている。その縁から、関西日仏学館は明治から大正にかけて京都で美術工芸の西洋化に携わった親仏派作家が出入りする場所となった。学館には公式行事に使用された芳名帳が残されているが、たとえば1930年にはクローデルと親しくした竹内栖鳳(1864-1942)の署名が残る(図1)。この頃、栖鳳はすでに京都市立絵画専門学校を辞していたが、欧州の展覧会に出品を重ね国際的評価を高めていた。その名声によって1924年11月にはフランス政府よりフランス勲章の勲五等(シュヴァリエ・ド・ラ・レジオンドヌール)を、さらに1930年1月には勲四等(オフィシエ・ド・ラ・レジオンドヌール)を受賞している。学館では勲章の伝達式も行われていたため、芳名帳は後者の表彰の折に記されたのだろう²。

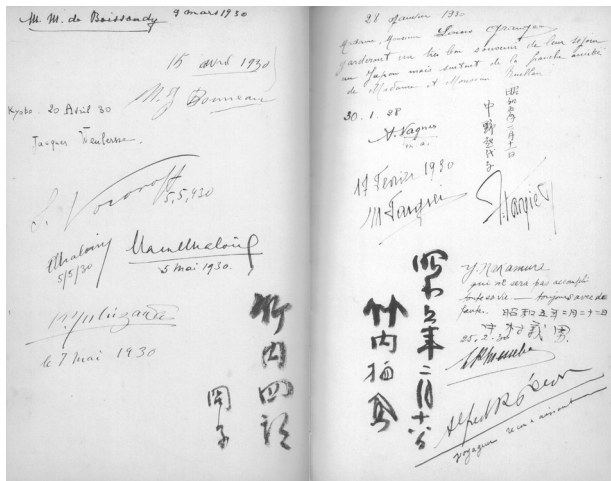


図1. 芳名帳、アンステイチュ・フランセ関西所蔵。1930年2月18日、竹内栖鳳と息子の竹内四郎の署名が残る。芳名帳は1922年から1955年に断続的に使用された。

学館とかかわりのあった美術家には、1899年のパリ万国博覧会の事務局として渡仏した経験をもつ、工芸家で陶磁器商の初代宮永東山(1868-1941)もいたようだ³。とりわけ洋画壇を先導した鹿子木孟郎(1874-1941)は深いつながりをもった作家の一人であった。パリでジャン＝ポール・ローランスに師事し、帰国後は浅井忠と関西美術学院を創立して後進を育てたが、平行して関西日仏学館美術部の指導も行っており、京都の美術界における日仏交流の中心的役割を果たしていた。そのむすびつきをよく示しているのが1931年の帝展出品作《マドモアゼル喜多》(図2)である。誰ヶ袖屏風を背景にした華やかな女性像だが、モデルは日仏文化協会の理事も務めた美術商・喜多虎之助の娘である。また、鹿子木は稲畑勝太郎のすすめを受けて本作をフランス政府に寄贈してい

る。また1933年にはフランス勲章の勲五等も受賞した。1930年代以降、日本の美術家への勲章の授与が目立つようになる。その背景には、悪化しつつあった欧州の政治状況を鑑みる必要があるだろう⁴。だが、1941年の鹿子木の葬儀が関西日仏学館で営まれ、美術部の指導も長きにわたって門下生へと引き継がれたことから、彼らが交流を育んでいたことがわかる。そのほか、学館で学び渡仏した美術家としては、画家の関口俊吾(1911 - 2002)が挙げられる。帰国後の関口の国際的な活動にも学館はさまざまな形で関わったようである。



図2. 鹿子木孟郎《マドモアゼル喜多》1931年、所在不明。

2. 吉田校舎建設と仏独の競合

1936年5月、世界大戦を目前に緊張が高まるなか、左京区吉田に関西日仏学館の新校舎が落成した(現・IFJK, 図3)。九条山では集客に限界があったことが建設の理由であるが、それを後押ししたのはむしろフランスをとりまく政情の変化であり、とりわけドイツとの対立関係であった。京都大学のある吉田地区は新校舎に最適だったが、ドイツもここに文化施設の設立を申し出たため、土地は両国で二分することとなる。フランスに先んじて独逸文化研究所(1934-1945)が開館し、語学講習会や講演会などの催しを開催する文化拠点を築いた⁵。このようなことから学館は「世界にフランスが占める座」を示すべく多額の資金を投じて新館建設を行ったのである。その対抗意識は建築にもはっきりと示された。ドイツ館は村野藤吾の設計による、街の景観に馴染むような寄棟で銅板瓦葺屋根の重厚感ある木造建築であるのに対し、フランスは自国の建築家レイモン・メストラレの原案に基づく新古典主義様式の豪華な建築となった⁶。この詳細な経緯についてはミシェル・ワッセルマン「動乱時代の関西日仏学館(1940 - 1945)」(立木康介訳、2017年、アンステイチュ・フランセ関西 HP 掲載)が詳細に論じているた

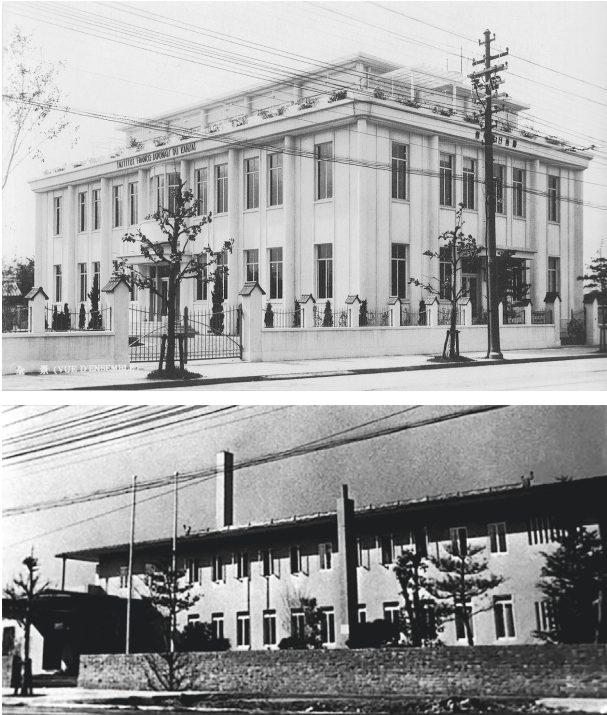


図3. 上から関西日仏学館吉田校舎、1936年。独逸文化研究所、1934年。

め参照していただきたいが、街の人々は両館を隔てる道を「アルザスの小道」などと評しつつその活動に強い関心を持っていたようだ⁷。

2-1. 戦時下の文化プログラム

藤田嗣治の《ノルマンディーの春》(1936年)が壁を飾る新校舎は、活動写真機など最新機器を備え、華やかに開館した。そこで重点を置かれるようになったのが文化的な催しであった。戦時中のプログラムをまとめた『活動報告書 1936-1946』には詳細な記録が残り、学術講演会、音楽会、美術展、映画上映会など充実した催しがあったことを伺い知ることができる⁸。パリ占領とともに学館は本国との連絡を絶たれてしまうが、その活動は1945年に接収されるまで継続された。では、これにどのような芸術・美術関係者が関わっていたのだろうか。

上の表は、前述した報告書から1940年前後の文芸・美術にかんする内容を一部抜粋したものである。催しは講演や音楽会に重点が置かれたため、美術展では鹿子木の素描展や、京都に拠点を置く生け花専慶流の西坂慶美(戦後は前衛いけばなの作家としても活動した)の展示などで、その数は多くない。一方、興味深いのは講演の講師陣にみられる東京日仏会館との関係である。

たとえば、1939年の講演者にはスイス人画家コンラッド・メイリとその妻の文筆家キク・ヤマタ(Conrad Meili, 1895-1969, Kikou Yamata, 1897-1975)がいる。メイリは1938年8月に日仏文化振興会の招聘で日仏混血の妻と共

1938年	6月27日	展示：鹿子木孟郎の中国のデッサンとクロッキー
	12月17日	講演：ポール・イズレール教授(アテネ・フランス)「芸術のための芸術とピエール・ルイスの作品」
1939年	2月12日	映画：「モン・サン＝ミシェル」, 「ルエルグ」
	3月12日	展示：西坂慶美(専慶流)生花展
	11月11日	講演：コンラッド・メイリ(画家)「フランスの絵画」、同日キク・ヤマタ夫人(文筆家)「フランスで知り合った作家たち」
	12月16日	講演：ポール・イズレール教授(アテネ・フランス)「現代フランス文学の偉大な潮流」
1941年	1月末	展示と講演：「医学の進歩へのフランスの貢献展」シャルロット・ペリアン(建築家)会場設計
	6月17日	講演：ヴィクトル・ゴルベフ教授(美術史家、極東学院)「アンコール・ワット」映写有り
1942年	10月31日	講演(創立15周年記念)：森田慶一教授(京都大学建築)「フランスの建築と日本の建築」

表、1940年前後における関西日仏学館の催し(講演、展示、映画上映の一部抜粋)

に来日し、戦時中は鎌倉を拠点に画家として活動していた⁹。また、同年には東京アテネ・フランスの教授のポール・イズレール(Paul Israir)の名前もある。ポール・ヴァレリーの研究を行っていたこの文学者は、日本ではフランス現代文学の翻訳も行っていたことで知られる¹⁰。メイリ夫妻やイズレールは、1941年、42年に東京の日仏会館でも講演を行っており、戦時という状況のなか東京と京都の学館のかかわりが強まり、人材不足もあってか、講演者も東西を行き来していたようだ。

またこの頃、公式に来日したフランスの文化人も東京だけでなく京都の学館にも訪れている。日仏会館と極東学院の教授交換会によって1940年来日した美術史家ヴィクトル・ゴルベフ(Victor Goloubew, 1887-1945)もその一人で、関西館でも講演している。ゴルベフが日仏会館で行ったアンコールワットについての講演には、知的な情報に飢えた知識人が詰めかけ、写真スライドによる作品紹介は聴衆を魅了したというが、京都でも同様の講演が行われたと考えられる¹¹。また、日本の商工省の要請で輸出品のデザイン指導のため1940年来日した建築家シャルロット・ペリアン(Charlotte Perriand, 1903-1999)も、やはり東京と京都の両館で展示会の会場設計を行っている。ここで取り上げたのは一例に過ぎないが、戦時中の日仏学館と同様に、関西館もフランスの最新の情報が集まる拠点として機能していたと考えられる。このような催しに京都の美術家がどのように影響を受けたのかまだ情報が十分でないが、今後明らかにしたい。

3. J.P. オーシュコルヌ

ここで重要な人物として、関西日仏学館の教授であったジャン＝ピエール・オーシュコルヌ (Jean Pierre Hauchecorne) について取り上げたい。1938年から教鞭を執ったこの人物は、前述した文化プログラムにも関与し、戦後にいたるまで学館の活動の要となった¹²。オーシュコルヌは神戸領事を務めたアルマン・オーシュコルヌ (Arman Hauchecorne) の息子として、1908年にパリで生まれた。だがファシズムが勢いを増しゆくヨーロッパに嫌気がさし、まだ見ぬ大きな世界に憧れを持ったという。かねてよりファン・ゴッホなど印象派の画家を通して憧れた日本は、当時としては唯一西欧諸国の植民地をまぬがれていたアジアの国であったため、彼の目指す場所となったようだ¹³。そこで父と入れ替わりに23歳で来日し、神戸領事館書記や旧三高のフランス語講師などを経て関西日仏学館へ着任した。71歳で帰国するまで京都で生活したオーシュコルヌは、日本の芸術に深い理解を持ち、京都の文化人や美術家とフランスをつなぐ架け橋となった人物であった。ここでは、戦争前後の彼と美術関係者の交流について注目してみたい。



図4. ジャン＝ピエール・オーシュコルヌ『朝日新聞』1984年3月19日より。

3-1. 民芸との出会い

オーシュコルヌが終生にわたり心を傾けたのは日本の民芸であった。民芸運動の推進者である柳宗悦の雑誌『工藝』を収集し、全国を訪ねて民芸品を収集したという。帰国後も美術史家エリザベス・フロレットが上梓した『柳宗悦 日本の芸術的革命性』(1986年、ソルボンヌ大学出版)に序文を寄せておりその関心は生涯を貫くものであったようだ¹⁴。オーシュコルヌは自身でも彫刻や水彩画などを嗜んでいたようだが、民芸への関心は大戦以前からのものだったという¹⁵。彼の活動の一つとして興味深いのは、学館着任前の1936年に日本の陶磁器にかんする書籍の仏語翻訳を国際文化振興会(現・国際交流基金)から請け負っていることである(図5)。この本の原著は、1934年に英語で出版された『陶芸における人間性』

(Kikusaburo Fukui, *Human Elements in Ceramic Art*, Kokusai Bunka Shinkokai, 1936.) という福井菊三郎による著作である。著者の福井は、戦前の三井財閥にて国際的な仕事を先導した実業家で、芸術にも造詣が深く、とりわけ日本陶磁器の熱心な収集家として知られていた¹⁶。彼が1927年に出版した『日本陶磁器と其国民性』(共同印刷)は日本の陶磁器が中国や朝鮮半島の文化を摂取同化してきた経緯を日本人の国民性や愛国精神にむすびつけて書いた陶磁製作史であった。この著作は稀代の実業家による本ということで、当時広く読まれていた¹⁷。日本政府の文化政策の一端を担った国際文化振興会は、1930年代に入ると海外向けに日本文化を紹介する外国語書籍をあいついで刊行するようになり、福井の著作も英語、仏語など他言語による簡易版が出版されたのである¹⁸。興味深いのはこの書籍の構成である。陶磁器の紹介本でありながら、作品図版は表紙のわずか一点にとどまり、かわりに、焼き物の制作工程が10頁以上にわたる挿絵によって実に丁寧に描かれている。工房制作の様子には作業にいそしむ女性や子供も描かれており、この書籍は日本人の暮らしのなかの手仕事と共にある陶芸のすがたを紹介するものであった。オーシュコルヌは民芸のなかでもとりわけ陶芸に関心をもち、全国の窯元を巡ったというが、このような仕事からもその関心は深められたのではないだろうか。

また、オーシュコルヌは江戸時代の民画である大津絵の収集と研究も行っていた。大阪で大津絵や民芸品などを扱う人気店「吾八」を運営していたのが美術商の山内神斧(山内金三郎, 1886-1966)である。彼は阪急百貨店の美術顧問として関西の商業美術にも広く関わった人物だが、その述懐によるとオーシュコルヌは1940年前後に大津絵のことを「相当丹念に」研究していたという¹⁹。パブロ・ピカソが大津絵を所有していたことはよく知られているが、民芸への関心の高まりとともに、欧州では



図5. Kikusaburo Fukui, *Les elements humains dans l'art ceramique*, traduit de l'Anglais par Jean Pierre Hauchecorne, Kokusai Bunka Shinkokai, Tokyo, 1936.

1930年代から1940年代以降に数カ国の芸術家や収集家たちが大津絵に関与しコレクションを形成していた。オーシュコルヌと同時期に神戸を拠点に活動した人物に、スペイン人彫刻家のエウダル・セラ (Eudald Serra, 1911-2002) がいる。彼も山内に薫陶を受けて大津絵を収集していた一人であった²⁰。セラはそののち母国で民芸の周知に努めたが、オーシュコルヌもこのような民芸をめぐる在日外国人のネットワークのなかにいたと考えられる。前章で言及した建築家シャルロット・ペリアンも、1940年に来日してまもなく京都を訪れており、五条坂の河井寛次郎邸を柳宗理らとともに訪れ親交を深めた(図6)。もちろん彼女の場合はデザインの研究という目的があるため、民芸に対する関心のありかも異なっていたが、ペリアンは関西日仏学館で仕事をしていることから、やはりオーシュコルヌともかかわりを持ったと推察できよう。このように、海外で広まった民芸への関心は、戦時中も日本に滞留していた外国人を介して身をむすび、戦後に世界各地で紹介されていくこととなった。



図6. 左から柳宗理、三神知、ペリアン、坂倉準三、河井寛次郎邸にて、1940年9月29日、河井寛次郎記念館蔵。

3-2. 抽象表現の美術家たちと

1945年8月の終戦を目前に、オーシュコルヌは理由なく警察に逮捕され不遇をかこうが、館長ルイ・マルシャン (Louis Marchand) とともに学館の再興に尽力した。だが京都は大規模な占領軍の駐屯地となり、大きな転換期を迎える。独逸文化研究所は廃止となったが、今度はアメリカとの関係が問題となり、当時の関西日仏学館の報告書には「占領当局との関係は常に不公平」であったと記されている²¹。街が様変わりしていくなかで、学館は新たな役割を模索しつつ運営を開始することになった。このようななか、1951年にはマチスやピカソの個展やサロン・ド・メ展が相次いで日本で開催される。展覧会は美術家のみならず市井の人にも、芸術におけるフランスの存在感とパリへの憧れを再び意識させる機会となった。関西日仏学館は支援者からの援助を受けて急速に復興し、1950年をすぎるところには、毎月パリから届く定期購

読の雑誌や映画、レコードといった設備を備え、文化プログラムも再開された²²。このような学館の活動はパリの情報にひどく飢えていた芸術家の心を捉え、再び京都とフランスをつなぐ場となっていった。

オーシュコルヌと美術家の交流は民芸だけにとどまらず、抽象表現の美術家にも及ぶものだった。たとえば幾何学抽象を牽引した彫刻家の堀内正和 (1911-2004) も、学館を利用した一人であった。堀内は1950年7月に京都市立美術大学の講師として赴任した。彼の手記によると、西洋美術の情報が手に入る場所を京都の街でくまなく探し、10月には学館の扉を叩いている²³。この時、学館ではパリで公開されたばかりのファン・ゴッホやマチスなどモダン・アートの巨匠についての美術映画が上映されていた。これらの映画は日本の美術雑誌でも話題になっており、堀内は大学の講義でどうにかこれを上映したいと学館に交渉している。オーシュコルヌは学生にむけた映画の日本語説明を請け合うなど、協力を惜しまなかった。

また、アンフォルメル の旗手として知られる画家の堂本尚郎 (1928-2013) も、オーシュコルヌと親交をむすんだ。日本画家から油彩画家への転身をもたらした1955年のパリ留学は、彼の画業とその人生を決定的に変えた。作家の証言によると、この留学の背景にもオーシュコルヌによる手助けがあったという²⁴。単身パリに到着した堂本がまず頼りにしたのは、ギメ美術館の図書館で司書を務めていたオーシュコルヌの妹であった。現在調査を進めているところであるが、この人物はアントワネット・オーシュコルヌ (Antoinette Hauchecorne) ではないだろうか²⁵。当時、ギメの館長を務めていたのは東洋史家ジョセフ・アッカ (Joseph Hackin, 1886-1941) であったが、彼は東京日仏会館の館長も経験し、吉田校舎落成時には調度品を送るなど関西館とも縁が深い。欧州における東洋研究の拠点にいたアントワネットは、自身も日本の美術本へ文章を寄せるなど両国と友好的な関係を築いていたようだ²⁶。堂本は彼女の家を寄寓し、下宿を斡旋して



図7. 堂本尚郎《絵画》1957年、油彩、カンヴァス、80.0 × 130.0cm、京都国立近代美術館蔵。

もらうなど手篤い援助を得たようだ。パリでの生活が糧となり、1957年にはスタドラ画廊の個展を成功させ、堂本は一躍時代の先端に躍り出ることになった。

このように、二つの都市を拠点に活動したオーシュコルヌ一家は、京都とパリの文化人をつなぐネットワークの中心に位置していたと考えられる。今回は堀内と堂本の二人を事例として挙げたが、その他の美術家との交流についてもこれからの調査で明らかになるだろう。

おわりに

本稿では、第二次世界大戦期における関西日仏学館の美術にかんする活動を整理し、京都の美術家たちと在日フランス人の交流の一端を再考した。これから関西館と東京館の文化プログラムの比較を進めることで、戦時下における親仏系美術家、美術関係者の動きがいっそう明らかになるだろう。また今回は、在日外国人の民芸への関心について触れたが、終戦後、欧米で盛んに行われた日本の陶磁器や民芸にかんする国際展に彼らはどのように関わっていたのだろうか。たとえば1951年のサロン・ド・メ展の交換展であったのが日本現代美術展（チェルヌスキ美術館、パリ）である。日本の現代陶芸を取り上げたこの展覧会は、美術家も陶芸作品を手がけるようになっていたフランスで注目を集めた。これには河井寛次郎に加え宇野三吾などの京都の作家も出品している²⁷。本稿ではオーシュコルヌという人物を取り上げたが、在日外国人がはたした役割にも注目することで、戦後へと続く日仏交流の背景を整理していきたい。

本稿の執筆においては、アンステイチュ・フランセ関西の長谷川さと子氏、立木康介先生には大変お世話になりました。コーパスの膨大な資料を網羅することは難しく、読解に当たっては研究チームの藤野志織氏の整理による書誌目録を参照させていただきました。また関西日仏学館元館長のミッシェル・ワッセルマン先生にはジャン＝ピエール・オーシュコルヌ氏についての貴重なお話をお聞かせいただきました。皆様に深く御礼申し上げます。

註

- 1 稲畑勝太郎は稲畑産業株式会社を創立し染色業界の発展に尽力した。日本で初めて映画を輸入した人物としても知られ芸術への理解の深い人物であった。
- 2 竹内栖鳳は1922年の日仏交換美術展に出品したのちフランスの要請でリュクサンブールに作品一点を寄贈し、日本画家として初めてサロン会員に推薦された。受賞の背景としてはこのような交流が考えられる。
- 3 1939年の日仏協会京都支部晩餐会の参加者に東山の名前がある。宮本エイ子『京都ふらんす事始め』駿河台出版社、1986年、174頁。
- 4 たとえば竹内栖鳳は1930年代にはフランスだけでなくドイ

ツとの関係も強め、1930年のベルリン日本美術展には前年より準備委員として活動し、出品作の一点をドイツに寄贈した。これをうけて1932年にはドイツ等赤十字賞、1933年3月にはゲーテ名誉賞を贈られている。

- 5 1945年に社団法人西洋文化研究所と改編・名称変更。建物は京都大学人文科学研究所が引き継ぐ。
- 6 メストラレの原案をもとに木子七郎が設計監督を担当した。なおメストラレは建築家オーギュスト・ベレの弟子に当たる。
- 7 吉田校舎建設の様子を新聞記事は次のように報じている。「一はハーケンクロイツの旗の下ナチ一色のファッション王国、一は今日なほ自由が守り本尊の国、その獨佛両国の文化研究所がわが大学街に肩をならべて建てられることはなんといつても愉快なコントラストに違ひない。(中略)この二つの建物を隔てる京大校舎へ通づる小路は今に“アルサスの小道”などと呼ばれるでせう。」「対立した獨佛 大学街に肩を並べた二つの文化研究所」『大阪毎日新聞』1936年1月16日。
- 8 Archives du Ministère des Affaires étrangères, Nantes, *Rapport recapitulatif sur les activités de l'IFJK année 1936-1946*, Na57. 京都大学人文科学研究所「みやこの学術資源研究・活用プロジェクト」作成コーパスから参照した。プログラムの中心が文学の講演や音楽会であったのは、学研肌で音楽も嗜んだ館長ルイ・マルシャンの影響があった。
- 9 コンラッド・メイリは滞在中は日動画廊で個展（1940年）、1943年には『油絵論』（東京堂）を刊行するなど画家として活動した。日仏会館で行った講演は以下の資料と文献を参照した。堀内正和日記、神奈川県立近代美術館所蔵。矢島翠『キク・ヤマタの一生』筑摩書房、1990年。
- 10 『近世小説撰』ポール・イズレル [編]、1-3巻、白水社、1934-1935年。レイモン・ラディゲ、フランシス・カルコ、ジョルジュ・デュアメルらの小説選書である。
- 11 藤原貞朗「第二次世界大戦期の日本と仏領インドシナの「文化協力」－アンコール遺跡の考古学をめぐって（前編）」『茨城大学人文学部紀要 社会科学論集』45巻、2008年、107-127頁。
- 12 René Sieffert, Kiku Yamata, Jean-Pierre Hauchecorne, *Le Japon : un portrait en couleurs*, Doré Ogrizek, Paris, 1954.
- 13 「人間登場 J.P. オシコルヌさん」『読売新聞』1979年5月12日、朝刊4頁。「ひと ジャン・ピエール・オシコルヌ」『毎日新聞』1979年6月8日、朝刊2頁。
- 14 Elisabeth Frolet, *Yanagi Sōetsu ou les éléments d'une renaissance artistique japonaise*, Publications de la Sorbonne, 1986, Paris, pp.11-12.
- 15 「街の美術展（下）オーシコルヌ氏彫塑と水絵」『朝日新聞』1936年11月6日、朝刊8頁。東京日仏会館の展覧会にオーシュコルヌが出品していた彫塑と水彩画に対する展評。《支那官史》など中国の老若男女を主題とした作品であったという。「鋭敏な感覚と、造形的作家としてののねらひの確かさだが、既成概念にとらはれんとする多くの日本の作家に多大の感銘を与へるものと信ずる」と評されている。
- 16 福井菊三郎の文化的な活動については以下の論文で触れられている。出水慈子「国際文化交流（その1）日米文化交流 - ジャパン・ソサイエティ」『大東文化大学紀要 人文科学』45号、2007年、A1-A17頁。齋藤康彦「近代数寄者のネットワークと存在形態 高橋箒庵「茶会記」を素材にして」『山梨大学教育人間科学部紀要』9号、2007年、304-318頁。なお、福井の邸宅（1922-3年）はアメリカの建築家アントニン・レーモンドの設計として知られる。三沢浩『A・レーモンドの住宅物語』建築思潮研究所、1999年。

- 17 南博「解説」『叢書日本人論 日本陶磁器と其國民性』31巻、大空社、1997年、1-2頁。この書籍は福井が東京アメリカン・スクールの学生に向けて行った講演に基づくもので、その後『The Japan Advertiser』と『中外商業新聞』に同内容が掲載された。
- 18 「東洋の盟主・日本へ注ぐ全世界の眼」『東京朝日新聞』1936年4月24日。
- 19 山内神斧「大津繪」『日本美術工藝』36号、1946年1月、25頁。山内は小林一三に請われ阪急百貨店の美術部門をや雑誌『阪急美術』の編集に携わった。山本真紗子「阪急百貨店美術部と新たな美術愛好者層の開拓」『Core ethics』6号、立命館大学、2010年、461-471頁。
- 20 セラの民芸収集について近年研究が進められている。リカル・ブル「カタルーニャにおける大津繪の受容—エウダル・セラ、セルス・ゴミス、ジョアン・ミロの活動を例として」『美術フォーラム 21 プリミティブ絵画? 近現代を生きる大津繪』紅林優輝子訳、36号、醍醐書房、2017年、154-161頁。ブルの論文によると、カタルーニャ出身のセラは日本に憧れて来日し、1948年までの13年間を神戸に暮らした。彫刻家としては1937年の二科展や、大丸百貨店や阪急百貨店などの展覧会に出品した。作家活動と並行して濱田庄司ら民芸の推進者と密接な交流を図り、とりわけ陶芸と大津繪に深く関心を寄せて作品を収集した。彼のコレクションがスペインでの1955年カタルーニャ民芸展の開催へむすびつた。
- 21 Archives du MAE, Nantes, *IFJK Rapport annuel sur l'activité de l'IFJK du 1er avril 1945 au 31 mars 1946*, Na.55. オーシュコルヌは占領軍の陸軍学校に無料で語学レッスンを教えるなどしていたという。
- 22 Archives du MAE, Nantes, *Lettre de Marcel Robert*, Na27-2.
- 23 堀内正和日記、1940-1951年、神奈川県立近代美術館所蔵。なお堀内は戦時中に東京のアテネ・フランセや日仏会館に頻繁に出入りしているため、関西の学館についても知っていたと考えられる。
- 24 日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ「堂本尚郎インタビュー 2008年11月15日」聞き手:池上裕子、粟田大輔。http://www.oralarthistory.org/archives/domoto_hisao/print_01.php (最終閲覧日、2018年11月1日)。
- 25 Archives des musées nationaux. Personnel et administration générale (Série O), *Répertoire numérique détaillé n° 20150497*, Première édition électronique Archives nationales, France, 2015.
- 26 アントワネット・オーシュコルヌ「彫刻された象牙板 カピシ遺跡」『美の美』第2集、日本経済新聞社、1958年、11頁。東洋史家・ベルナル・フランクともつながりがあったようで著書の謝辞にも彼女の名前を記している。Bernard Frank, "Histoire et philologie japonaises", *École pratique des hautes études. 4e section, Sciences historiques et philologiques. Annuaire 1967-1968*, École pratique des hautes études, 1968, Paris, p.572.
- 27 チェルヌスキ美術館で開催された日本現代美術展の企画は陶磁器研究者の小山富士男であるが、パリ開催の展覧会ということもあり、東京あるいは京都の日仏会館関係者が何かの形で関与したとしても不自然ではない。

【図版出典一覧】

- 図1. 『関西日仏学館 1927-2003』関西日仏学館、2003年。
- 図2. 『鹿子木孟郎史料』鹿子木孟郎調査委員会 [編]、学藝書院、2016年。
- 図3. 『関西日仏学館 1927-2003』関西日仏学館、2003年。『社団法人独逸文化研究所 創立五週年紀要』独逸文化研究所、1940年。

図4. 『朝日新聞』1984年3月19日、夕刊1頁。

図5. Kikusaburo Fukui, *Les elements humains dans l'art ceramique*, traduit de l'Anglais par Jean Pierre Hauchecorne, Kokusai Bunka Shinkokai, Tokyo, 1936.

図6. 『シャルロット・ベリアン自伝』北代美和子訳、みすず書房、2009年。

図7. 『堂本尚郎展』京都国立近代美術館ほか、2005年。

【参考文献】

〔一次資料〕

アンスティチュ・フランセ関西 HP (<https://www.institutfrancais.jp/kansai/about/lhistorique/>)

京都大学人文科学研究所「みやこの学術資源研究・活用プロジェクト 京都における日欧交流史の初期調査」作成コーパス。

日本美術オーラル・アーカイヴ・ヒストリー (<http://www.oralarthistory.org/>)

堀内正和文庫、神奈川県立近代美術館所蔵。

Archives des musées nationaux. Personnel et administration générale (Série O), Première édition électronique Archives nationales, France, 2015.

〔書籍〕

『アンスティチュ・フランセ関西 創立90周年記念冊子』アンスティチュ・フランセ関西、2017年。

池村俊郎『戦争とパリ ある二人の日本人の青春 1935～45年』彩流社、2003年。

『鹿子木孟郎史料』鹿子木孟郎調査委員会 [編]、学藝書院、2016年。

『関西日仏学館 1927-2003』関西日仏学館、2003年。

『京都の歴史』第9巻、学芸書林、1976年、449-452頁。

『京都市市政資料 市制の形成』第1巻、京都市政史編纂委員会、京都市、2009年。

『京都市市政資料 市制の形成』第4巻、京都市政史編纂委員会、京都市、2003年。

『京都府百年の資料 美術工藝編』第8巻、京都府立総合資料館、1972年。『京都大学人文科学研究所 創立80周年』京都大学人文科学研究所、2009年。

『現代日本の図書館構想 戦後改革とその展開』今まど子、高山正也 [編]、勉政出版、2013年、87-154頁。

『孤独な帝国日本の一九二〇年代 ポール・クロード外交書簡 一九二一-二七』奈良道子訳、草思社、2018年。

『東洋意識 夢想と現実のあいだ 1887-1953』稲賀繁美 [編]、ミネルヴァ書房、2012年。

『東西文化の磁場 日本近代の建築・デザイン・工芸における境界的作用史の研究』山野英嗣 [編]、国書刊行会、2013年。

徳美松太郎『鹿子木孟郎 その生涯と作品』関西日仏学館、1936年。

中條忍『ポール・クロードの日本「詩人大使」が見た大正』法政大学出版、2018年。

西川祐子『京都の占領 生活史からみる京都 1945-1952』平凡社、2017年。

『社団法人独逸文化研究所 創立五週年紀要』独逸文化研究所、1940年。

『シャルロット・ベリアン自伝』北代美和子訳、みすず書房、2009年。

『占領下の京都』立命館大学産業社会学部鈴木良ゼミナール、文理閣、1991年。

『占領期雑誌資料大系 大衆文化編 (5) 占領から戦後へ』岩波書店、2009年。

『占領期図書館研究の課題』根本彰 [編]、東京大学大学院教育

- 学研究科図書館情報学研究室、1999年。『空への輪郭 村野藤吾のデザイン・エッセンス』建築資料研究社、2001年。
- 橋爪節也『大大阪イメージ 増殖するマンモス/モダン都市の幻影』創元社、2007年。
- 『美の美』第2集、日本経済新聞社、1958年。
- 福井菊三郎『日本陶磁器と其國民性』共同印刷、1927年。再録『叢書日本人論』31巻、大空社、1997年。
- Kikusaburo Fukui, *Les elements humains dans l'art ceramique, traduit de l'Anglais par Jean Pierre Hauchecorne*, Kokusai Bunka Shinkokai, Tokyo, 1936.
- 藤原貞朗『オリエンタリストの憂鬱 植民地主義時代のフランス 東洋学者とアンコール遺跡の考古学』めこん、2008年。
- 『堀内正和資料集成』美術出版社、1994年。
- クリストフ・マルケ『大津絵 民衆的諷刺の世界』角川ソフィア文庫、2016年。
- 三沢浩『A・レーモンドの住宅物語』建築思潮研究所、1999年。
- 宮本エイ子『京都ふらんす事始め』駿河台出版社、1986年。
- 矢島翠『キク・ヤマタの一生』筑摩書房、1990年。
- Catherine Dossin, *The Rise and Fall of American Art, 1940s-1980s : A Geopolitics of Western Art Worlds*, Ashgate, New York, 2015.
- Bernard Frank, "Histoire et philologie japonaises", *École pratique des hautes études. 4e section, Sciences historiques et philologiques. Annuaire 1967-1968*, École pratique des hautes études, Paris, 1968, pp. 567-574.
- Elisabeth Frolet, *Yanagi Sōetsu ou les éléments d'une renaissance artistique japonaise*, Publications de la Sorbonne, Paris, 1986.
- René Sieffert, Kiku Yamata, Jean-Pierre Hauchecorne, *Le Japon : un portrait en couleurs*, Doré Ogrizek, Paris, 1954.
- 〔展覧会カタログ〕
- 『上野伊三郎+リチ コレクション展 ウィーンから京都へ、建築から工芸へ』京都国立近代美術館、2009年。
- 『交差する表現 工芸/デザイン/総合芸術』京都国立近代美術館、2013年。
- 『竹内栖鳳展 近代日本画の巨人』東京国立近代美術館ほか、2013年。
- 『堂本尚郎展』京都国立近代美術館ほか、2005年。
- 『シャルロット・ベリアンと日本』神奈川県立近代美術館ほか、鹿島出版会、2012年。
- 『日本画の前衛 1938-1949』京都国立近代美術館、2010年。
- 〔論文〕
- 井戸桂子「クローデル大使の旅と異文化理解」『駒沢女子大学研究紀要』24号、2017年、65-81頁。
- 桑原規子「国際文化振興会主催「仏印巡回現代日本画展覧会」にみる戦時文化工作 藤田嗣治を「美術使節」として」『聖徳大学言語文化研究所論叢』15号、2007年、229-262頁。
- 桑原規子「国際文化事業から対外文化工作へ 一九四一年の国際文化振興会主催「仏印巡回現代日本画展覧会」」『「帝国」と美術 一九三〇年代日本の対外美術戦略』国書刊行会、2010年、258-303頁。
- 児島薫「鹿子木孟郎 ローランスとの出会い」『鹿子木孟郎 ローランスとの出会い』府中市美術館、2001年、114-121頁。
- 立木康介「イントロダクション—アンステイチュの創設者、クローデルと稲畑」講演原稿、シンポジウム「京にフランスあり！アンステイチュ・フランセ関西の歴史と記憶」2017年11月（アンステイチュ・フランセ関西 HP 掲載）
- 出水慈子「国際文化交流（その1）日米文化交流 ジャパン・ソサイエティ」『大東文化大学紀要 人文科学』45号、2007年、A1-A17頁。
- 齋藤康彦「近代数寄者のネットワークと存在形態 高橋帚庵「茶会記」を素材にして」『山梨大学教育人間科学部紀要』9号、2007年、304-318頁。
- 西川祐子「古都の占領 占領期研究序論」『アリーナ デジタルアース最前線 占領期京都を考える』15号別冊、中部大学総合学術研究院、風媒社、2013年、143-162頁。
- 林洋子「サロン・ド・メとアンフォルメル 1950年代のフランス 現代美術の日本への影響」『東京都現代美術館紀要』3号、1997年、27-31頁。
- 林洋子「パリ・東京・仏領インドシナ 親仏派日本人美術家の系譜 黒田清輝と藤田嗣治を中心に」『京都造形芸術大学紀要』13号、2009年、40-48頁。
- 林洋子「画家・藤田嗣治 日仏の美術家・作家をつなぐ要」『日仏文化』83号、日仏会館、2014年、93-100頁。
- 藤原貞朗「第二次世界大戦期の日本と仏領インドシナの「文化協力」アンコール遺跡の考古学をめぐって（前編）」『茨城大学人文学部紀要 社会科学論集』45巻、2008年、107-127頁。
- 藤原貞朗「第二次世界大戦期の日本と仏領インドシナの「文化協力」アンコール遺跡の考古学をめぐって（後編）」『茨城大学人文学部紀要 社会科学論集』46巻、2008年、21-40頁。
- 藤原貞朗「日仏会館誕生前史 リヨンと日本の知られざる文化交流」『青淵』728号、2009年、20-23頁
- 藤原貞朗「オリエンタリストの日仏交流 大戦間期および戦時下の日仏交流の逆説」『日仏文化』79号、2011年、75-94頁。
- 藤原貞朗「オリエンタリストたちの日仏交流 日仏会館とフランス極東学院をめぐって」『日仏文化』83号、日仏会館、2014年、75-94頁。
- リカル・ブル「カタルーニャにおける大津絵の受容 エウダル・セラ、セルス・ゴミス、ジョアン・ミロの活動を例として」『美術フォーラム 21 プリミティブ絵画？近現代を生きる大津絵』紅林優輝子訳、36号、醍醐書房、2017年、154-161頁。
- クリストフ・マルケ「アンリ・チェルヌスキとテオドール・デュレが見た明治4年の日本」『近代画説』8号、明治美術学会、1999年、12-32頁。
- ミシェル・ワッセルマン「関西日仏学館の設立」『日仏文化』83号、日仏会館、2014年、75-81頁。
- ミシェル・ワッセルマン「動乱時代の関西日仏学館」講演原稿、立木康介訳、シンポジウム講演原稿、2017年11月（アンステイチュ・フランセ関西 HP 掲載）
- Michael Lucken, "À la poursuite infinie des désirs intérieurs : Yanagi Sōetsu avant le Mingei", *Cipango*, 16, 2009, Paris, pp.23-41.
- 〔雑誌、新聞〕
- オーシュコルヌ J.P. 「ひかりの手」『世界の子供』牧野四子吉画、世界文学社、1949年1月、37-51頁。
- オーシュコルヌ J.P. 他「外人の見た京都」『婦人公論』37号、1951年10月、122-129頁。
- オーシュコルヌ J.P.、堂本尚郎、O・ケリー、千宗興「座談会 新春世界の旅」『淡交』7号、1953年1月号、66-75頁。
- オーシュコルヌ J.P. 「外国人が招かれることについて」『改造』34号、1953年11月、205-210頁。
- 橋爪節也「“しゅみじんのまち” 大阪レヴュー 郷土玩具からひろがる「趣味人」ネットワークと近代・大阪の想像力」『上町台地 今昔壁新聞』7号、2017年、2-11頁。
- 「国際連帯のかけ橋」『朝日新聞』1984年3月19日、夕刊1頁。
- 「対立した獨佛 大学街に肩を並べた二つの文化研究所」『大阪毎日新聞』1936年1月16日。
- 「人間登場 J.P. オシコルヌさん」『読売新聞』1979年5月12日、朝刊4頁。
- 「ひと ジャン・ピエール・オシコルヌ」『毎日新聞』1979年6月8日、朝刊2頁。